

ひとつの感想

ほんとうの看護学への期待

大野 弘機

(北海道医療大学名誉教授)

本書を読んで、認知症と統合失調症を通して人の深遠を探ることが著者のライフワークであることが良くわかりました。認知症と統合失調症を通して“人間とは何か”を考える。この切り口は、極端条件から問題を解明するという実験科学の研究手法に通ずるところがあります。

以下、読後の感想を一言したためます。

認知症患者における見当識障害は、赤ん坊の精神活動の成長の逆の過程をたどって現われる、すなわち時間、場所、人の順に、というのは、たぶん、命にかかわらない脳機能(高度と考えられている精神活動の部分)から落ちてゆくということなのでしょう。しかし、砂時計のようにサラサラと均等にではなく、岩と砂の混合物のような構造が崩れていく姿のように思われます。

人としての共通する部分(一般的な部分)と、個々に異なる部分(過去の個別の経験や知的活動で獲得した部分)が存在しているというのは、ちょうど、体が骨格をなす硬い部分とそれを覆う軟らかい部分から構成されていて、岩と砂のような素材がある構造を形成しているというふうにイメージされました。それは、風雨に晒されたとき、弱い部分からサラサラと落ちてゆきます。ただし、人によって岩の構造が異なり、また岩と砂の量比が異なり、さらに岩と砂をつなぎとめる粘着剤の強さも異なります。見当識障害に個別性が現われるのは、その違いによるのでしょう。

著者は、看護がすぐれて身体的な営みであることを繰り返し述べています。私は、局所麻酔である手術を受けたときの体験を思い出しました。

看護師さんがそっと私の手を握ってくれました。その時、母親の胎内にいるような安堵感に包まれました。彼女は何かを察し、体のこわばりにふれ、私の不安を感じ取ってくれたのでしょう。看護師さんの感性に感謝でした。

医学は理系よりもむしろ文系であると主張されていた時期があります。15年くらい前でしょうか。医学が心の問題をなおざりにしてきた反省から出た言葉です。

心が大切だというお題目ではなく、ケアする手を持つ看護の実践に目を向けるべきなのではないでしょうか。著者の言う「ほんとうの看護学」はそのような意味でも必要とされているように思います。